

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號一第 卷(十四第)

月一年四十和昭

經濟論叢 每月一日發行
第四十八卷第一號 昭和十四年一月一日發行
大正四年六月二十一日第三種郵便物認可

作田博士還曆記念論文集

(禁轉載)

目次

作田莊一博士肖像……………	卷頭
作田莊一博士稿「日本經濟學の正體」……………	一
日本的學問の文化史的意義及び基本的諸典型……………	文學博士 米田庄太郎……………三
東亞民族の形成……………	文學博士 高田保馬……………五
日本經濟史研究の發展……………	經濟學博士 本庄榮治郎……………五
理論學としての日本經濟學……………	經濟學博士 谷口吉彦……………六
産業組合の耕地管理……………	經濟學博士 八木芳之助……………六
印度に於ける國民的産業能率の遲滯性に就て……………	經濟學士 大塚一朗……………一〇八
「日本的」なるものゝ意義及び探求に就て……………	經濟學士 中川與之助……………一三六

資本主義と支那事變……………	經濟學士 柴田敬……………	一四二
明治時代農村手工業の消長……………	經濟學士 堀江保藏……………	一三三
我國に於ける預金通貨統計の發達……………	經濟學士 中谷實……………	一七六
保險思想の發展……………	經濟學士 佐波宣平……………	一九三
歴史學派に於ける國民經濟の概念……………	經濟學士 白杉庄一郎……………	二二一
日本共同體經濟學の建設者佐藤信淵……………	經濟學博士 石川興二……………	二二七
國事資金法の提案……………	經濟學博士 小島昌太郎……………	二四九
農山漁村財政の五箇年記録……………	經濟學博士 汐見三郎……………	二六九
支那の社會成層……………	法學博士 財部靜治……………	二八八

日本經濟史研究の發展

本庄 榮治郎

一 序 言

歴史は事實の反映である。故に我々は事實を無視するを得ざるのみならず、事實が現はす所の状態に基いて考察せなければならぬ。過去の事實は既定の存在である。然しその事實を如何に把握するかは決して一定不變のものではない。是れ古來幾多の史家があらはれ、各種の歴史が記述せられた所以である。事實の把握は歴史家の個性と時代の思潮とによつて異らざるを得ない。嘗は重要なものとして考へられしものが、今は然らざるものとなり、以前には顧みられざりし事柄が、今は重要な意義を有するものと考へられる。かくて絶えず史學の新たな研究が行はれて、歴史は絶えず書き改められる。歴史の形、その内容、事實の觀察解釋が絶えず發展しつゝあるのは當然であらう。

史學は社會の發展といふこと、即ち社會を動く姿に於て目的物として居るものである。従來は特に政治上又は軍事上の方面に重きを置いて、社會の發展を考察したものであるが、我々は社會の發展には經濟上の進化による所が頗る大なることを認め、この經濟事實の發展について考察するものを經濟史と名づけて、之が研究に努めつ

あるものである。尤往時に於ても經濟的方面の史的研究が絶無であつたといふわけではないが、特に經濟史が一の専門の學科として研究さるゝに至つたのは、西洋に於ても十九世紀以後のことであり、我國に於ては明治維新以後に屬するものといはざるを得ない。而して經濟史研究が重要視せらるゝに至つた所以は、社會生活における經濟の極めて重要となりしこと、經濟學が一の科學として發達するに至りしこと等に存するであらう。

二 明治維新以前の研究

我國の上古中世に於て編纂された多くの歴史を見ると、その中には少からず經濟に關する事實も掲げられて居る。かの奈良朝から平安朝へかけて勅撰せられた六國史の中にも經濟に關する事實が掲げられてゐるが、この六國史中の同一事件を拾つて編纂された菅原道眞の「類聚國史」を見ると物價・金融・土地制度等に關する事實が載せられてゐる。また大寶令の註釋書である「令集解」にも土地制度や義倉や租税に關する制度などの沿革が調べられてゐることが判る。此等は特に經濟史を研究したといふ意味ではないにしても、當時に於て既に他の制度文物の變遷と同じく、經濟制度の沿革にも多少留意してゐた證據とすることが出来る。

徳川時代になると、武家時代とはいふものゝ前時代とは非常に趣を異にし、財政經濟に關することも次第に重要な地位に進みつゝあつたもので、當時の學者中にはこの方面に大に注意する者も出來て來た。そして漢籍に食貨のことが記されてゐる關係上、當時の漢學者の中には、經濟史的研究を或る程度まで試みるものもあつた。

新井白石・伊藤東涯・荻生徂徠・室鳩巢・太宰春臺其他多くの著名學者の著書には經濟史的記述を見ることが出

來る。かの「日本經濟大典」其他に收録された徳川時代の多くの經濟書の中には、我國經濟事實の沿革を記したものが少くない。纏つたものゝ一例としては「大日本史食貨志」や近藤守重の「錢録」「金銀圖録」草間直方の「三貨圖彙」などを擧ぐることが出来る。勿論當時は經濟といふ言葉は經國濟民の意に用ゐられたもので、寧ろ食貨の語が今日の經濟に近い意味を持つてゐた。かくて徳川時代には經濟史的研究は大に進んだものであるが、それは尙不完全なものであつて、今日の如き科學的研究方法に依つたものではなかつた。

三 明治維新以後の研究

明治維新以後日本經濟史の研究は著しき發展を遂げた。これが一方に經濟學の發達と關連を有し、他方には實社會たる經濟界の發展を反映せることは云ふ迄もなき所であるが、大體に於て之を三期に區分して考察することが出来る。第一期は維新以後日清戰爭に至るまでの期間であつて草創時代、第二期は日清戰後の三十年頃から世界戰爭に至る期間で確立時代、第三期は世界大戰後から最近まで、即ち大正八九年頃から日支事變前の昭和十一年頃までの勃興時代である。以下この三期に分ちて多少詳細なる説明を加へやう。

第一期 維新の改革に於て舊制度舊思想は著しく破壊せられて西洋の制度文物を輸入するに至つたものであるが、十年頃に至るまでは所謂維新の變革期として、動搖と不安との間に終始した。明治二年政府は史局を設置し、或は國史中の缺本を探索し、或は史料の蒐集が行はれ、十年に至つて修史局を太政官内に置くことゝなつたが、この間「復古記」や「明治史要」等が注意すべき編纂物であつたに過ぎない。この時に當つて田口卯吉氏の

「日本開化小史」(十年乃至十五年刊)が公にせられ、歐洲的知識と經濟的見地とを以て、我國文化の發達し行ける有様を論じたことは、斯界に一生面を開いたものであり、十二年には「古事類苑」の編纂事業が始まり、之より以後史的研究は漸く盛んとなつた。

日本經濟史についても明治の初め十年間は見るとべきものがない。個人の著述として發行せられたもの二三あるも、特に主要なる著述としてとり立てゝいふべき程のものではない。然るに、十年前後より二十年代に至るまでに、中央諸官廳に於て盛に編纂事業が行はれ、その成果の公刊されたものが甚だ多い。それは新しい制度を樹てるためには、一方歐米先進國の制度も調査し、他方には我國古來の沿革を尋ねることが必要であり、更に今に於て編纂事業を起すに非れば、史料散逸して收拾す可らざるに至る虞があつたからである。このことは「大日本貨幣史」や「古事類苑」編纂の理由に徴するも明かである。而してそれ等官廳の編纂事業について最も力を致したものは大藏省であり「大日本貨幣史」「大日本租稅志」等の外、幾多の編纂が行はれた。

(註) 明治七年二月三日得能紙幣頭は鈔史即ち紙幣史編纂の議を上申した。その一節に曰く「當寮建設日尙淺く百事草創未だ編輯に暇なし。今や舊札交換既に了し、漸次官省札に及べり。宜しく此時にして格鈔の起源・沿革・條例・布告及び交換順序等抄錄編纂せざれば終に散逸して復た收録すべからざるに至らん」云々と。此議が容れられ、「大日本貨幣史」の編纂となつたものである。また明治十二年三月西村茂樹は文部省に「古事類苑」編纂のことを建議したが、その一節に「明治維新の後文運漸く開け外國の事物も亦荐りに輸入せらるるの時に方り、彼我互に相ひ比較研究せんと欲すれば、俄かに數百部の書籍を涉獵して之を求めざる可らず、而も屢之を求めて遂に得ること能はざるの困難に遭遇し、人をして轉た多岐亡羊の歎を發せしめ、知らず識らずの間に外尊内卑の感を深からしめたること亦蓋鮮少にあらず。此れ藝林の一大闕典にして識者の切に

患ふる所なりき』と述べてゐる。之は類聚書編纂の必要を説いたものであるが、また以て一般編纂事業の必要を説けるものともいふことが出来る。

かくの如く政府が直接編纂事業に手を染めたことは、恰も産業界に於て政府の直接干渉政策が行はれて國民を長夜の夢より覺醒せしめ産業界の發達を計つたと同様であり、明治二十年以後に於ける個人的研究を刺戟したことも少からず、我國の文運に貢獻したる點多大なることはいふ迄もない。尤當時の研究方法はやはり舊套を脱せず、編年體に事實を羅列したものが多く、事件を原因結果の關連に於て究明するには至つてゐないが、よく史料を蒐集し考證に力を致してゐるから、史料としては貴重なるものが多い。

自明治元年
至二十九年 日本經濟史關係 官著 一覽

書名	冊數	編纂・藏版官廳	編纂者	編纂・刊行年月	備考
會社全書	二七	大藏省紙幣寮		五―八年稿	〔集成〕第十五・十六・二十一卷所收
舊藩外國逋債處分錄	五	大藏省制理局・國債寮		五―九年稿(?)	〔集成〕第九卷所收
皇國造幣寮濫觴記	一	大藏省造幣寮	久世造幣權助口授 島邨記錄權中屬編	七年稿	〔明治大正大阪市史〕第五卷所收
大日本貨幣史	四六	大藏省	吉田賢輔	九―十六年刊	大正十四・五年複刻洋裝四冊
大日本貨幣史參考	二五(洋七)	大藏省	吉田賢輔 米本少藏	十一―十六年刊	大正十四年複刻洋裝三冊
民事慣例類集	一	司法省	民法編纂委員	十年五月刊	〔明治文化全集〕第八卷所收(解題參照)
理財稽蹟	四	大藏省	小菅揆一	十一―十一年稿	

理財稽蹟參考書

五

大藏省

小菅 葵一

十一年十一月稿

「集成」第一卷所收の「理財稽蹟」は「理財稽蹟參考書」を底本とし「理財稽蹟」を以て字句等を訂したるもの。原本は大震災の際焼失。

農政垂統記

四

内務省勸業寮

織田 完之

十年十一月刊

農書要覽

一

内務省勸業寮

高島 千畝

十一年一月刊

工藝志料

二

内務省博物局

黒川 眞頼

十一年刊

德川禁令考

前聚六二
後聚四〇

司法省

菊池 駿助

十一年—二十三年刊

二十一年増補訂正洋一冊となる「黒川眞頼全集」に収む。二十七八年に洋装前聚六冊後聚四冊として刊行。昭和四年以降「司法資料」にて覆刻。同六年に吉川弘文館にて洋装十二冊として覆刻せらる。

舊幕府理財會要書類
材料・原書・
修譯書合せ
冊一七七八

大藏省

大藏省

遠藤 謹助 外八名

十一年—十九年稿

十六年一先づ脱稿其後修正中、十九年行政整理のため編纂を中止、原本は大震災のとき烏有に歸す。修譯書は「徳川理財會要」の名の下に「日本經濟叢書」「日本經濟大典」に収む。大正十一年出版の「日本財政經濟史料」は「原書」を主とし「材料」の幾分を増補綴合して作られたるもの。

大藏省沿革志

二四

大藏省

遠藤 謹助 外八名

十三年一月以降刊

「集成」第二・三卷所收

全國民事慣例類集

一

司法省

民法編纂委員

十三年七月刊

「明治文化全集」第八卷及び「日本經濟大典」第五〇卷に収む。

勸農局沿革錄

一

農商務省農務局

十四年五月刊

「集成」第九卷所收

藩債處分錄

二

大藏省國債局

十四年四月稿

「集成」第九卷所收

藩債輯錄

一

大藏省國債局

十四・五年頃稿

「集成」第九卷所收

日本經濟史研究の發展

族祿處分錄	六	大藏省國債局			十四年頃稿	「集成」第八卷所收
地租改正報告書	一	大藏省			十五年二月*	「集成」第七卷所收
地租改正例規沿革撮要	一	大藏省			十五年二月*	「集成」第七卷所收
大日本帝國驛遞志稿及 大日本帝國驛遞志稿考證	一	農商務省驛遞局	青江秀		十五年三月刊	「集成」第七卷所收 昭和三年朝陽會にて「大日本交通史」として覆刻。「日本產業資料大系」第十卷にも收む。
大日本租稅志	三〇	大藏省租稅局	野中準	外八名	十五—十八年刊	四十一年金澤稅務調查會にて洋裝一冊として翻刻。大正十五年乃至昭和二年朝陽會にて洋三冊として再刻。
舊典類纂	一一	元老院	横山由清 細川潤次郎		十六年五月刊	十年三月出版屆。十六年六月の題字あり。
商事慣例類集	三	司法省	商法編纂委員		十六年七月—十七年四月刊	「日本經濟大典」第四九・五〇卷所收。
(第一回)興業意見	三〇	農商務省	前田正名		十七年十二月刊	「集成」第一八・一九・二〇卷所收
貿易備考第一冊	一	大藏省記録局			十八年十月刊	原稿は完成せしも十九年の行政整理により第二册以下の出版を中止。大震災により原稿全部焼失。
北海道開拓使事業報告	七	大藏省			十八年十一月刊	
明治貨政考要	三	大藏省			二十年五月刊	「集成」第十三卷所收
國債始末	一	大藏省			二十二年五月*	
工部省沿革報告	一	大藏省			二十二年四月刊	「集成」第十七卷所收
大藏省沿革略志	一	大藏省記録局			二十二年六月刊	
吹塵錄	三五	大藏省	勝海舟		二十三年九月刊	後二册に合本。 「海舟全集」に收む。

吹塵餘錄	一〇	大藏省	勝海舟	二十三年九月刊	〔後一冊に合綴。海舟全集に收む。〕
紙幣整理始末	一	大藏省		二十三年十月*	〔集成〕第十一卷所收
準備金始末	一	大藏省		二十三年十一月*	〔集成〕第十一卷所收
準備金始末参考書	一	大藏省		二十四年二月*	〔集成〕第十一卷所收
大日本農史	三	農商務省	織田完之	二十四年七月刊	〔日本産業資料大系〕第一卷所收
農事参考書解題	一	農商務省農務局		二十四年七月刊	〔日本産業資料大系〕第一卷所收
國債沿革略	一	大藏省		二十四年十二月刊	
農商務省沿革略誌	一	農商務省		二十五年三月刊	
大日本農功傳	一	農商務省農務局	織田完之	二十四年七月刊	〔二十五年六月の序あり〕
帝國大日本電信沿革史	一	遞信省	前田銀次郎	二十五年七月刊	〔日本産業資料大系〕第三卷所收
横須賀造船史第一卷	一	横須賀鎮守府		二十六年刊	
帝國歲計豫算史	一七	大藏省		二十七年十二月以降刊	四十二年十月にて完
會計検査院史	一	會計検査院	川口嘉	二十九年十月刊	〔集成〕第十七卷所收
古事類苑	五一	文部省 皇典講究所 神宮司廳	小中村清矩等	二十九年以降刊	大正三年にて完 洋五〇冊、和三五〇冊、外に總 目錄索引洋一冊
理財稽蹟附錄	一	大藏省	小菅揆一	十一年稿	大震災にて焼失
大日本通商史書類	二四四	大藏省主税局關稅課		十一年稿	十九年行政整理のため編纂を中止、本文三冊は脱稿、大震災により全部焼失

米穀經理記事	三	大藏省	飯田 巽	十一年六月稿	原本大震災により焼失、他に寫本あり
準備金會計錄		大藏省出納局		十七—二十三年稿	大震災により焼失
準備金雜書		大藏省			前書の補遺、大震災により焼失 十九年行政整理により編纂中止 大震災により焼失
府縣舊税法	一五	大藏省記録局			大震災により焼失他に寫本あり
紙幣存函	一	大藏省	浦 春 暉	二十一・二年頃稿	大震災により焼失他に寫本あり
銀行全書	一二	大藏省			大震災により焼失
紙幣全書		大藏省紙幣寮			

備考「集成」とあるは「明治前期財政經濟史料集成」の略

* 印を附せるは出版年月の記載なく、上司への報告の日付によれるもの

本調査に關し大藏理事官高橋俊氏、大藏省囑託吉川秀造氏の好意を謝す

既に述べたる如く明治の初十年に於ては個人の著述に見るべきものがなかつたが、十年乃至二十年の期間に於ても前同様であつた。之は一には政府に於ける修史事業のために、學者がその方面に吸収されたにもよるであらうが、國民一般に於ては維新變革の直後のことでもあり、實業界の發達も未だ十分でなく、従つて一般歴史とやゝ異なる經濟史的研究に意を注ぐに至らなかつたものとも考へられる。然るに二十年以後には事情は之と異り、個人の著述中主要なるものが次第にあらはるゝに至つた。横井時冬氏の「大日本不動産法沿革史」、栗田寛氏の「莊園考」、萩野由之氏の「日本財政史」、遠藤芳樹氏の「日本商業志」、菅沼貞風氏の「大日本商業史」の如きはその一例である。

之を要するに第一期に於ては十年乃至二十年に於て官廳の編纂出版物が多くあらはれ、二十年以後個人の著述が漸く現はれたが、官撰の著述も猶少からず存する有様であつた。従つて此時代の特徴は私が夙に『官著時代』³⁾の語を以ていひあらはしてゐる如く、官廳の編纂事業及出版が盛んであつた點に存する。而して實業界に於てこの期間が資本主義發達の準備期であつたと同じく、經濟史研究に於ても、次の確立期の準備時代であつたといひ得る。

第二期 日清戰役後我國の資本主義經濟は著しき發展をなしたものであり、日露戰爭に至るまでの期間は發展の第一期、日露戰爭から世界戰爭に至るまでは産業發展の第二期であるが、日本經濟史の研究に於ても三十年前後に科學的研究の基礎が出来上り、ついで經濟界の進展に應じて一般社會科學の發達と共に、日本經濟史の研究が一段の進展を見るに至つたもので、本期に於て日本經濟史の研究は確立期に達したものである。

本期に於ける特徴の第一は、科學的研究の基礎が出来上つたことである。蓋西洋の學問の移入に伴つてその研究方法も次第に進歩し、記述の方法も從來の如き編年體や非科學的のものは次第に頽れ、科學的方法に基いて事件の原因結果を明にするに足る記述方法に重きを置くに至つた。殊に三十年前後に於て内田博士が日本經濟史の研究に入らるゝや、その論稿に於て屢々經濟史の意義を論じ、研究方法を説き、或は資料を解説せられたことは、斯學の成立に重大なる意義を有するものと思ふ。博士は明治二十九年七月帝國大學(東京)文科大學國史科を卒業せられ、同年大學院に入られたが、大學院における研究題目は「日本經濟史及史學と經濟學との教育的價值」であつた。三十一年一月の史學雜誌第九編一號に「經濟史の性質及範圍について」と題する一文を發表せら

3) 大正十年九月刊、日本經濟史原論(52頁)に始めてこの語を用ゐた

れたが、當時に於ては經濟史なる言葉は頗る新しい言葉であつて、恐らく博士によつてこの言葉が一般に普及するに至つたものであらうと思ふ。商業史なる言葉は古くから行はれ、又産業史なる言葉も用ゐられたが、經濟史なる言葉は當時見當らない。其後三十二年三月刊行の東京帝國大學附屬圖書館和漢書目録には經濟史なる分類項目があり、田尻博士の「經濟史眼」には三十二年四月の序文があるから、その頃から經濟史なる言葉が漸く用ひられ來つたものであらう。内田博士は既に二十九年より經濟史なる言葉を用ゐられてゐたのであつた。尤、經濟學史なる言葉は既に早くから用ゐられ、二十三年の菅喜田和三郎氏の論文にも見えてゐるが、經濟史なる語は見えない。その後、四十年代に至つても、經濟學史と經濟史との言葉が一般の人々には嚴密に區別されず、混同誤解されてゐた有様であつた。⁵⁾

内田博士は三十二年二月東京帝國大學文科大學講師となり、日本經濟史の講義を擔當されたが、これ恐らく我國の大學における日本經濟史の最初の講義であつたであらう。この事實は日本經濟史發達史上特記すべき事實であるが、その講義が極めて異彩を放つてゐたことは、當時、聽講せられた石橋博士の追懷談を見るも明かである。⁶⁾既に述べた如く博士は屢々經濟史の性質・研究方法等に論及されたが、四十五年三月に「經濟全書」中の一冊として公にせられた「經濟史總論」は此方面における研究を簡單に纏められたものと見ることが出来る。尙一般史學理論の方面にも幾多の勞作を發表されてゐることも注意すべきである。

第二の特徴は日本經濟史に關する一般的研究のあらはれたことである。即ち特殊部門の研究ではなく我國經濟發達の全般を概觀せんとする學者の努力がなされたことである。之については横井時冬博士の「日本商業史」「日

4) 皇典講究所講演第四二號及四五號
5) 平沼淑郎、我が邦に於ける經濟史學、早稻田政治經濟學雜誌第二十九號
6) 藝文、第十年十號

本工業史」、内田博士の「經濟史」、福田博士の「日本經濟史論」(獨逸文)等を擧げることが出来る。

横井博士は既に二十一年に「大日本不動産法沿革史」を著はされたが、二十五年に「帝國商業史講義録」三十一年に「日本工業史」⁷⁾「日本商業史」三十三年に「日本商業史維新後の部」三十七年に「日本殖産史」を著はされてゐる。右の「帝國商業史講義録」は名は商業史であるが、記述の範圍は商業のことのみならず工業・度量衡・交通・貨幣・金融に及び、時には礦業・水産物・農業のことに及べる條もあり、後の「日本工業史」「日本商業史」の基礎をなせるものであらう。博士の著述として最も著聞せるものはいふ迄もなく日本工業史及日本商業史であつて、兩者を併せて考ふれば、日本經濟史一般を説明されたものと見て差支なきものであり、當時に於て劃期的著述であつたことはいふまでもなく、博士が日本經濟史の開拓者の一人であることは動かすべからざる事實である。

内田博士も亦日本經濟史を一般的に論述されてゐる。それは明治三十一年頃東京專門學校講義録の「經濟史」と題するもの之である。之は博士の全集にも収録されてゐないため、往々見落してゐる人もあるが、菊判一二八頁のもので、内容は序論・第一編日本經濟史の大要・第一章上古・第二章奈良及平安時代・第三章鎌倉及室町時代・第四章江戸時代から成つてゐる。即ち本書によつて日本經濟史の大要を説かれたものであるが、事項によつては明治時代のことも附記してある。博士の最初の計畫では引續き支那經濟史及西洋經濟史を講述される豫定であつたが、それは實現しなかつた。三十五年に「日本經濟史」と題する講義録が出てゐるが、それは緒論と上古の總説・人口の増殖・農業の發達の數項目だけで終つてゐる。後大正初年頃に書かれたものと思はれる「日本經濟

7) 日本工業史は明治三十一年二月八日出版登録(三十一年三月十二日官報参照)

史概要」が全集の「日本經濟史の研究」の卷頭に收められてゐる。

更に福田博士が獨逸文を以て公にされた「日本に於ける社會的及經濟的發展」⁸⁾は一九〇〇年即ち明治三十三年に公にされたもので、その内容は歐文の題名によつて明かなる如く、我國の社會經濟的發展の大要を述べたものであるが、その意圖された所は日本の社會經濟的發展は歐洲のそれと一致するといふ點にあり、且つ一方には法制史的の記述が多く、他方には經濟史上の重要問題を盡せるものではないが、經濟史研究の發達に大なる影響を與へたものとして注意すべきものである。四十年四月に坂西由藏氏の譯「日本經濟史論」が公刊されてから一般の人にも讀まれるに至つたことと思ふ。

(註) 本書著作の來歴については、編纂者たるブレンターノ (Tajo Brentano) 氏の序文に明かである。即ち曰く「近者予は非常に聰明なる一日本人を聽講生中に得たり。福田徳三是なり。彼は既に東京にてドツェントたり。其の歐洲に來れるは唯一層の修養を積まんが爲めのみ。予の經濟史に關する講筵に於て、予は常に彼が微笑を湛ふるに眼光の炯々たるものあるを見たり。一日予は其の何が故に爾かく笑ふやを問ふ。彼答へて曰く、予が師を通じて歐洲經濟史に就て聞く所は、悉く日本の歴史と一致すればなりと。是に於て予は彼に囑するに日本の經濟史を歐洲の讀者に紹介せんことを以てせり」と。福田博士が翻譯者坂西由藏氏に宛てたる書簡には「小生が日本歴史學者の講義を聞きたるは、故横井教授の日本商業史あるのみ。其他斯界の者宿は一回の面接をすら得たることなし。而して小生が日本歴史を學びたるは小學校に於てせしのみ」とあつて、横井博士との關係を知り得ることは興味あることである。⁹⁾

第三の特徴は特殊部門の研究が益々盛んとなつて來たことである。即ち研究の對象が各方面に擴張され、有益なる特殊研究が多くあらはれて經濟史研究の發達を如實に物語るに至つた。之は前期の書名と本期の書名とを比

8) Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan, Stuttgart 1900.

9) 日本經濟史論、前付、11頁、24頁

較すれば容易にその状況を察し得るわけであるが、二三の異色ある研究を挙げれば、「日本生命保險業史」(三十七年)「日本の經濟と佛敎」(四十五年)「日本銀行沿革史」(大正二年)「米價變動史」(大正三年)「社寺領性質の研究」(大正三年)等の如きこれである。更にまた地方經濟史に關する研究も多くあらはれた。例へば

赤穂鹽業誌(三十二年)

足利織物沿革誌(三十五年)

北越機業史(三十六年)

兩替商沿革史(三十六年)

秋田藩林制正誌(三十八年)

灘酒沿革史(四十一年)

舊加賀藩地割制度(四十四年)

静岡縣蠶糸業沿革史(四十五年)

石川縣蠶業沿革史(大正四年)

舊藩時代における開墾獎勵一斑(大正六年)

等はその一斑であり、經濟史的記述に富んでゐる大阪市史(大正二乃至四年)も此期間に發刊されてゐる。

第四の特徴は、經濟史料の刊行せられ始めたことである。一般國史に關する史料の刊行は早くより行はれてゐた。例へば「正續國史大系」が明治三十年乃至三十七年に刊行され、「改定史籍集覽」は三十三年乃至三十六年に刊行されたが、直接經濟史に關係ある史料が叢書として出版されるに至つたのは本期に入つてからである。即ち瀧本博士の「日本經濟叢書」三十六冊が大正三年から刊行して同六年に完結、「通俗經濟文庫」十二冊が大正五年乃至六年に、國書刊行會本中の「徳川時代商業叢書」三冊が大正二年乃至三年に刊行された。「日本經濟叢書」の出版が劃期的の出版であつたことは勿論であり、此等の資料刊行が此後の經濟史及經濟思想史研究に與へた影響は實に大なるものがある。

要するに本期に於ては日本經濟史の開拓者たる横井博士、斯學の確立者たる内田博士を始めとして、福田博士瀧本博士の貢獻があり、尙三浦周行博士も此期に經濟史に關する有益なる研究を發表されてゐる。かくて日本經

濟史に關する先覺者が何れも此期間に斯學の基礎を置かれ、日本經濟史が茲に始めて科學として成立し、研究が次第に進められて斯學の確立を見るに至つたことは注意すべきことである。

第三期 世界戰爭の時代に於て我國の經濟は未曾有の發達をなし異常なる躍進を遂げたが、大正九年頃から深刻なる不況に陥り、社會經濟狀勢は悪化し、轉換期としての諸狀勢を示すに至つたものであるが、此間に於て日本經濟史の研究は一層の發展を遂げ、特に社會經濟組織や階級問題を對象とする方面に大なる發展を見、研究團體の成立、専門雜誌の刊行も行はれ、有益なる著作は前期に比して質的にも量的にも著しく發展した。

此期間に於て前述の一般的研究が更に盛んとなり、諸家の日本經濟史の概觀書があらはれたこと、又特殊研究が種々の方面に行はれて詳細克明なる研究が多く現はれたこと、地方經濟史の研究が更に盛んとなり、各地に於て編纂された地方史誌にも經濟史的方面を重視するものが多くなつて來たこと、史料の出版が一層盛んとなり、その主なるものだけでも次の如きものがある。

- | | | | |
|--------------|----------------|----------|----------------|
| 日本財政經濟史料 | 十一冊(大正十一—十四年) | 近世社會經濟叢書 | 十二冊(大正十五—昭和二年) |
| 日本産業資料大系 | 十三冊(大正十五—昭和三年) | 日本經濟大典 | 五十四冊(昭和三—五年) |
| 海軍史料叢書 | 二十冊(昭和四—六年) | 日本林制史資料 | 三十冊(昭和五—九年) |
| 明治前期財政經濟史料集成 | 二十一冊(昭和六—十一年) | 近世地方經濟史料 | 十冊(昭和六—七年) |

以上は前期に引續いて本期に於て一層の發展を見るに至つた事項であるが、更に本期に於てその特徴と見るべきことは、第一に社會經濟史的研究が著しく盛んとなつたことである。例へば我國に於ける社會組織・經濟機構に關する研究の如きこれである。先づ社會史について見るに、一般的のものとしては三浦博士の「國史上の社會

問題」が大正九年にあらはれ、其後諸家の日本社會史が公にされた。また農民史に關する研究は殊に多く現はれ、農民の生活、農村問題、百姓一揆に關する研究が盛んに行はれ、無産階級・社會運動に關する研究もあらはれ、又資本主義經濟發達の研究も多く出版された。

第二に唯物史觀については既に明治四十年前後に於ても二三の主要なる論文が發表されてゐるが、本期に於てはこの視角から著作されるものが多くなつた。即ちマルキシズムの立場に立つ研究が、此期に於て量的にも質的にも發展して來たことである。これは昭和二三年の「マルクス主義講座」、七年の「日本資本主義發達史講座」の刊行、並に雜誌「歴史科學」の發行等からも、又その學派に屬する人々の著書論文が多くあらはれたことによつても之を知ることが出来る。而してその經濟史理論の適用に關して諸種の問題が論争を繰返へすに至つたものである。尤この期の終りには社會狀勢の變化からその勢が挫かれて來たことを注意せねばならぬ。

第三に幕末乃至明治維新に關する研究が、此期間殊に昭和に入つて著しく起つて來たことも注意すべきであらう。かの「明治文化全集」「明治前期財政經濟史料集成」の如き叢書が出版され「明治維新史研究」「明治維新經濟史研究」「維新農村社會史論」「幕末經濟史研究」等幾多の著作が公にせられたことによつても、この傾向を察することが出来る。尙明治維新以後の發展も研究の對象となり、明治大正時代の經濟史財政史が次第に研究されてゐることも注意すべきである。

第四には經濟史に關する學會並に専門雜誌その他の刊行さるるに至つたことである。昭和四年に經濟史研究會が組織されて（後に日本經濟史研究所となる）十一月より月刊雜誌「經濟史研究」を刊行し、社會經濟史學會は昭和六年五月から

「社會經濟史學」を刊行し、早稻田大學經濟史學會からは「經濟史學」(昭和十年四月)^(註)が刊行された。また「經濟史年鑑」が昭和七年以來年々刊行せられ、「日本經濟史辭典」が十一年六月以來分冊刊行を續けてゐることも經濟史研究の發達を物語るものであらう。かくて各大學はもとより専門程度の學校に於ても日本經濟史に關する講義が一般に行はれ、國史方面の人々も亦經濟史に重大なる關心を持つこととなり、それ等人々の日本經濟史に關する研究も多くあらはれたこと、また地方經濟史研究の發展と共に郷土史家の勞作の増加したことも見逃すことは出来ない。

(註) 四年七月成立の經濟史研究會に先立つて、京都經濟史研究會が四年四月に出來、「日本交通史の研究」「明治維新經濟史研究」の二著を公にし、六年春經濟史研究會に合流し、八年五月日本經濟史研究所の設立により、經濟史研究會の會務を同所に移して今日に及んでゐる。社會經濟史學會は昭和五年十二月の創立で、「社會經濟史學」は初めは四季刊行であつたが七年四月から月刊となつた。猶第三期以後に屬するが、慶應義塾經濟史學會からは「歴史と生活」第一號を昭和十二年十月に發行したことを附記してをく。

第五に注意すべきことは、わが日本經濟史の研究が歐米學者の注目を惹き、それ等人々の研究に引用され批判され或は翻譯されて居ることである。これ亦我國における經濟史研究發達の一面を示すものであり、明治前半期に於ける經濟學移入時代と對比して轉た感慨に堪えざるものがある。¹⁰⁾

四 結

言

以上三期に分ちて日本經濟史研究の發達を概觀した。それは便宜上、著書を主とし、雜誌論文を除外し、第三

10) 例へば André Andradés, La Population du Japon 1931, Les Finances de l'Empire Japonais et leur Evolution 1932.
大塚金之助、書齋通信、日本評論第十卷十二號

期については學者各自の研究に論及することを避けて、一般の傾向だけについて述ぶるに止めたが、最近に至る迄の發達は大體明かにし得たことと思ふ。

かくの如く日本經濟史研究の發達は目覺ましいものがあり、史的研究の主流をなすに至つたものとも考へられる程であるが、然し經濟史研究が既に資料蒐集時代を去つたとは考へられない。研究者が他人の蒐集せる史料を援用し採引するのではなく、自ら史料を蒐めて克明に史實を檢討することは、今猶勿論必要である。公式論的研究は最近下火になつたやうであるが、他方には理論化への傾向は甚だ強い。日本の經濟の發達が、日本といふ特殊なる自然的・人間的・社會的環境に立つ以上、日本の特徴を求めることは當然であり、我國固有の經濟的文化の發展が明確にされなければならぬことは言ふ迄もない。然し日本の特徴は單なる理論で組立てられるものではなく、科學的な分析と實證とを通しての研究によつてのみ、始めて眞實に理解せられるものと思ふ。かくて我國經濟發展の本質、即ちその特殊性と普遍性とが明確にせられ、發展の眞の姿が把握せらるるに至るであらう。それと同時に日本經濟史學の一層の發展も亦之を期待し得べきであらう。